

Active Learning の理論と実践に関する一考察
LA を活用した授業実践報告 (13)
A Study on the Theory and Practice of Active Learning
Report on the course supported by Learning Assistant #13

三浦真琴 (関西大学教育推進部)

Makoto Miura (Kansai University, Division for Promotion of Educational Development)

要旨

着任以来、文章力の育成を目的とする科目を担当し、生涯に亘って書くことを楽しいと感じられる文章力と感性を養うために工夫を施してきた。近年、学生の文章力の低下は著しく、それを克服するための新たな試みを始めた。しかし問題の解決には程遠い。LA と TA と協議してアイデアを出し合い、次期からの解決策を模索した。

キーワード

文章表現教育 学生の文章力低下 添削指導の限界 / **Guidance for improving writing skills, Decline in language ability among the students, Limits of correction guidance**

1. 文章表現教育の普及

『理科系の作文技術』や『レポートの組み立て方』などでつとに有名な木下是雄は、小・中・高・大の教師とともに「学習院言語技術の会」を組織し、小学校から高等学校まで一貫した言語教育のテキストを作成した(渡辺・松濤、2021)。大学生の国語能力低下の原因が大学入学前の国語教育にあると指摘されるよりも前に教育段階を越えて文章表現教育に取り組んだのは慧眼である。

1991年には9名の大学教師、2名の小学校教諭が発起人となって日本言語技術教育学会が創設された。国語教育の改革を目的とした学会が、大学生の学力低下に関する調査結果(鈴木他、2000)の報告より前に創設されたことに、善意の教師の意識の高さと問題を見抜く洞察力の鋭さをうかがうことができる(波多野、1992)。

井下(2008)は、1981年の大学教育学会の課題研究において「大学教育における論述作文、読書および対話討議に関する意味づけと方策」が掲げられていたことに注目し、この頃より大学生の「書く力」の低下が認識されていたと指摘する。井下は1980年代を大学の文章表現教育の黎明期と位置づけ、いくつかの大学で日本語表現科目が開設

された1990年代を草創期として捉える。この草創期に先述の学会が登場したのは興味深い。2000年代は文章表現科目が初年次教育としての位置を定立した普及期であると同時に、取り組みが多様化する転換期とされる。2010年以降はディシプリンと教養を以後の展開の鍵とする発展期と展望した(井下、2008)。井下の指摘以降、文章表現教育がどの程度、普及しているかを文部科学省のデータ¹をもとに表1に示す。

表1 初年次教育における取組の推移

年度	初	作文	プレ	動機	論理
2007	75.4	62.4	55.3	53.4	34.5
2009	79.8	69.0	63.1	60.8	40.6
2011	83.5	74.5	65.6	63.8	46.3
2013	88.2	79.4	71.6	68.3	55.1
2015	92.6	84.9	78.8	73.3	62.6
2017	92.6	87.1	79.6	75.9	63.8
2019	91.9	86.3	80.4	77.2	64.4

※表中、「初」は初年次教育、「作文」はレポート・論文の書き方等の文章作法、「プレ」はプレゼンテーション等の口頭発表の技法、「動機」は学問や大学教育全般に対する動機付け、「論理」は論理的思考や問題発見・解決能力向上のそれぞれに取り組んでいる大学

の比率。文部科学省のデータでは初年次教育に取り組んでいる大学数を分母としているが、ここでは全国の大学数を分母とした。

初年次教育の取り組み内容を知ることができるのは2007年からである。この年、文章作法を身に付けるプログラムを展開している大学は472校、全国の6割強の大学が取り組んだ。6年後には1.3倍の621校（全国比79.4%）、10年後には1.4倍の678校（同86.3%）に増加した。初年次教育に取り組む大学の93.9%（86.3/91.9）が文章作法を身に付けるプログラムを展開しており、口頭発表の技法を身に付けるプログラムを展開する大学の比率（87.5%）より6ポイントも高い。大学生の文章力低下に対する強い危機感を読み取ることができる。

2. 文章力低下の原因

文化庁文化庁国語課（2012）によれば、読む力・書く力・話す力・聞く力について16歳以上の男女2069名に尋ねたところ、「非常に低下している」と答えたのは、それぞれ20.2%、36.8%、19.5%、13.2%であった。「非常に低下している」と「やや低下している」とを合算すると、それぞれ78.4%、87.0%、69.9%、62.1%であり、「書く力」の低下が圧倒的に強く認識されている。

鈴木（2016）は「文章を書く能力を育成すべき教科である国語でさえ、もはや文章を書く指導はほとんど行われておらず、ひたすら文章の解釈の指導が行われている」と指摘する。

渡辺・島田（2017）は、総合大学7校の新入生598名を対象に、高等学校の国語で学ぶ機会があった項目について調査した。高等学校学習指導要領に示された23項目のうち、書く力の学習について「十分に学ぶ機会があった」とする比率は7%から20%のレンジに留まり、読む力（全項目30%以上）に比べて著しく低い。

小中高生ならびに小中高の教師を対象とした全国大学国語教育学会の調査（2018）によると、書くことに関する指導は、小学校では年に6回以上、中学校では3～5回、高等学校では1・2回という回答が最も多かった。教育段階があがるにつれて

作文指導がなされなくなり、書く力の育成が軽視されていることが分かる。

社会で役立つ国語力の育成を掲げる文部科学省が「現代の国語」では原則として文学作品を扱わない方針を示すなど、十全な国語教育を展開することが困難な環境にある。学校における国語教育に多くを望めない状況の下、問題を解決するためには、先述の「言語技術の会」のように、教育段階や担当科目を越えて、児童・生徒・学生の国語力を高めるための協働が不可欠である。しかし、それは筆者一人の手には余る。目の前の受講生の作文力をどうやって育てていくのか、それが今の課題である。

3. 新しい語彙や表現法を伝える

筆者はレポートライティングの指導の前に必要なことがあると考えている。レポートが上手く書けないのは、その書き方、作法を知らないからというよりは、書くこと自体に苦手意識を持っているからではないか。受講生の大半が読書感想文の課題をきっかけに書くことが嫌いになったと教えてくれたことから、窮屈な枠組みのない作文体験をすることが必要であると考えた。井下（2008）は文章表現教育を学習技術型・専門基礎型・専門教養型・表現教養型の四つに類型化しているが、筆者の取り組みは表現教養型に該当する。

最初に取り組んだのは、テーマや字数などに縛られずに自由に文を編むことである。制約のない作文を学生は歓迎したが、無題の作文は経験したことがなく、かなり戸惑ったようである。受講生には、必ず自らのうちに書きたいこと、書く必要のあることが種子として眠っているので、それを掘り当ててほしいと根気よく伝えた。

思いや願いを伝えるだけでは何も始まらない。きっかけとなる具体的なものが需要である。新しい語彙や素敵な表現を知ると、そこから世界が広がると考え、「言葉のアルバム」（表2）と「いつかは使ってみたい素敵な表現ノート」（表3）を編んで学生に提供している^{2, 3}。

使ったことのない言葉や表現を用いるためには、

扱う話題や文章の構成などに、今までと違う発想を試みる必要がある。そのことが受講生には新鮮だったようである。また、提出された作品には科目担当者とLAが感想やコメントを寄せるとともに、他の受講生の感想も募ることにした。それらは毎回「文麿通信」「達人通信」として編集し、受講生に配付している。当該科目を担当してしばらくの間は、このようにして文章力をみがく工夫をした⁴。

表2 言葉のアルバム (抜粋)

千絮萬麻	様々に亂れいりこむこと
有りのすさび	怠惰な生活を送ること
石に花が咲く	実際にはあり得ないこと
一掬の涙	ほんのわずかな涙。(もともとはたくさんの涙)
もみじに置けば紅の露	置かれた状況で色合いを変えること

表3 いつかは使ってみたい素敵な表現 (抜粋)

素的な表現	ありきたりの表現
あやしむに足りない	不思議ではない
思い屈した時は	憂鬱な時は
細やかな心寄せ	心配り
古今に冠絶している	とびぬけている
想念の糸は尽きるこ とがない	思い出は尽きない

4. 誤用や悪文に囲まれていることを伝える

学生は新聞、著書等で使われる表現が正しいものだと思い込んでいるが、なかには目も当てられない誤謬がある。そのことを知るのみならず、見抜く力が必要である。そのことを伝えるために誤用や悪文の例を学生に示している。

「信者獲得に大きな威力を発揮した『戦慄の予言』は、一方で教祖自身を追い込む『両刃の刃』ともなった」「編集手帳」読売新聞(1995・5・17)。

「事件の数日前、少年は猫の死体を正門前に置いた。…(中略)…だが、まったく騒ぎにはならなかった。少年は「無視された」と周囲に漏らした。少年はさらに社会を震撼とさせる事件を起こし

た。」「天声人語」朝日新聞(1997・7・1)。

前者は「両刃の剣」の誤り、後者は「震撼する(させる)」の誤りである。

このほか、「はいふ」をすべて「配布」と表記する新聞特有の約束事にも注意を喚起しなければならない。加えて著書や論文にも間違った表現があることも伝える必要がある。

『『老い』とはいやなことばである。どの国のことばを見ても、『老い』とそれから派生する語には、侮辱的な意味がある』(「プログラムとしての老い」日高敏隆『正論』1996・5)

中国では「老」は敬意を示す大切な言葉であり、この一文は学識不足を露呈している。

国語辞典の中にも謝った語釈を載せているものがあるので、Webで手軽に検索できる辞書はもつてのほか、必ず複数の辞書に当たるべしと伝えている。以上を通じて、言葉に対してセンシティブになれかしと願っている。

5. ファンタジーの文法と恋する日本語の登場

受講生は毎年顔ぶれが変わるので、授業のコンテンツにマンネリズムを感じることはないが、科目担当者ならびにLAは、少しずつであるが新鮮味が失われていくのを感じている。そこで数年に一回の間隔で新しい試みを加えている。

その一つが「ファンタジーの文法」である。これはRodari(1973)が勧める「ファンタジーの二項式」によって創造的想像力を働かせ、新しい物語を生み出していくエチュードである。受講生は黄色のカード、青色のカードにそれぞれ異なる単語を記す。それを色別に二つの袋に集め、中身をシャッフルしてから、LAがカードを一枚ずつ取り出して、二語の組み合わせを作る。受講生はその組み合わせの中から自分が書きたいものを選び、二つの単語あるいはそれを彷彿とさせるものが登場する物語を編む。二つの異なる概念を結びつける「異化(ストラニアメント)効果」を体験し、それを作品へと昇華させていくのがねらいである。どのように作品を編めばよいのか、なかなか

か見当をつけられない受講生のために、制作経験のあるLAが作品を編んで見せることがある⁵。

自分の知らない単語を辞書の中に発見し、その語義を知ったうえで小品を編む「恋する日本語」も新たに採り入れた。文筆家と同程度を望むべくもないが、文章を書く際には必ず辞書を引く習慣を身に付けてほしいと願い、小山(2009)にヒントを得て始めた試みである。Web上の辞書に頼ると語義を誤る場合のあることを伝え、必ず紙の辞書を使用するように指導している⁶。

6. 新しい創作スタイルの登場

最近になって採り入れたのが「こんなところにそんなものが」という試みである。まず受講生が「こんなところにそんなものがあるのは不思議だ」と感じられる場所とアイテムの組み合わせを考える。その後、他の受講生が考えた組み合わせを二つ選び、一つは「何故、このような場所にそのようなものがあるのか、想像を巡らせる物語(想像編)」を編む。残る一つは「このような場所にそのようなものがあるのには、このような理由、背景、経緯があるという物語(事実編)」を編む。事実編とはいえ、その事実は存在しないので、いずれの物語も創造的想像力を動員して作る。同じタイトルのもとで想像編と事実編を担当する二名の受講生は、場所とアイテムの詳細だけを打ち合わせて決めておく。それ以外のことについては一切のコンタクトが禁じられる。この試みのおもしろいところは、どちらの物語を担当するにせよ、パートナーがどのような物語を編むのかを必ず想像するということにある。場所とアイテムは同じ、創造的想像力を働かせることも同じ、しかし出来上がりはそれぞれの想像を超えたところにある、このような制作体験は文を編む楽しさにつながる。受講生が制作に取り組む前に、科目担当者とLAが作品を編み、受講生に見せることもある⁷。

例年、壮大で読み応えのあるストーリーが数多く編まれる。ときには全編を網羅する、より大きな物語を新たに創りたいという要望が受講生から

出されることもある。学生が、制約に縛られる窮屈な作文のイメージを払拭し、のびのびと創作する喜びを享受していると筆者は感じていた。

7. 語彙力、文法知識、発想力の低下が如実に

しかし、この1、2年、創作を楽しむために不可欠の要素が欠落していると感じている。以下にその根拠として数例を示す。

①「乗っていた自転車から降りて、打ち寄せる波と海岸の境目まで走り、そこに立ち止まって、視線を遙か遠くの水平線に向ける。」

②「ドーンッ。おっ、花火じゃん。民衆もざわざわと騒ぎ出し、視線を上にあげる。」

③「週に一回、家の近くのスーパーに、一週間分の食品を買いに行くのが日課である。」

④「我が家の台所に、一枚の落ち葉が舞った。(中略)朝食の後片付けに皿洗いをしていた私は、つい手を止めて葉っぱを見遣った。」

⑤「私の家では毎年、年末年始になると祖父母の家に帰省する」

①は「波打ち際」という単語を知らないために冗長な表現をしている。また、「乗っていた」は不要である。②は「民衆」、③は「日課」、④は「見遣る」、⑤は「帰省」の意味を理解していない。また、「年末年始」は「年末」とすべきである。

⑥「花火をバックに空を見あげている、彼女の閑麗な顔立ち。スッと筋の通った鼻筋、白く艶かしい首筋。」

⑦「ある日の放課後、廊下を歩いていると音楽室から微かにピアノの音が響いてきた。」

⑧「私は母子家庭で、母は私を育てるために毎日朝早くから夜遅くまで働いており、私は保育園の時間以外は、近くに住むおばさんの家に預けられていた。」

⑥は「頭痛が痛い」と同じ過ちを犯している。また、花火を見ているのに「花火をバックに空を見あげている」のは不自然である。⑦は「微かに」「響く」のがおかしい。⑧の「私」は「家庭」ではない。一文に多くのことを盛り込みすぎ

て、まわりくどい表現になっている。また人称代名詞「私」のほとんどが不要である。

⑨「彼女は美しい容姿を持っている」

⑩「「こんな素晴らしいところが」と片言な日本語で言った。」

⑪「それが四つ、重なって置かれている」

⑫「俺はバクバクと脈打つ心臓の音をなんとか押さえようとしながら、本間の後についていった。」

⑨は「容姿を持つ」が不適切であり、⑩は名詞に「な」を付けて形容動詞としているのが誤りである。⑪は自動詞と他動詞の受動態を重ねている。「重ねられている」で文意は通じる。⑫の「心臓の音」は「拍動」とすべきであり、「押さえる」は「抑える」としなければならない。

⑬「上から下に行き良いよく流れる川水。」

⑭「なんとなく立ち上げてから、2つを交互に見た瞬間、衝撃が走った。」

⑮「コロッケはすべて肖像画の直線状にあったのだ」

⑯「生徒数彼は、これといって仲良い友達がいるわけでもなく、放課後に一人で森や川に行く時間が好きだった。」

⑰「一日中そのことしか考えていた」

⑬から⑰のいずれも、推敲をしていないことが明々白々である。

⑱「私はフロントのおじさんに「あのかばんは私が動かしてしまったんです。すみません。」「盗られたと思っていたので、戻って安心しました。またのご利用お待ちしております。」

⑲「そこでここに書き残し、私が死んでしまった後、誰かが約束を守ってくれることを信じて。」

⑱は主語の「私は」に呼応する述部がない。「フロントのおじさん」は「フロント係」とするのが妥当である。⑲は述部が不完全である。

この他にも看過できない誤りがあるが、枚挙に暇がないので割愛する。

8. 封印していた添削と新しい試み始める

ここで文章作成に関する主な問題点を簡単にまとめておく。その中には先に例示しなかったものも含まれる。

- 1) 語彙が乏しい。
- 2) 主語と述語が呼応していない。
- 3) 同義反復表現が多用される。
- 4) 句読点の使い方が不適切。
- 5) 同じ人称代名詞が繰り返される。
- 6) 不要な接続詞の多用（特に「そして」⁸⁾）。
- 7) 名詞に「な」をつけて形容動詞にする。
- 8) 四字熟語に「する」をつけて動詞にする。
- 9) 書かずともわかることをまわりくどく書く。
- 10) 「する」と表現すべきを「してくる」「している」とする。
- 11) 「ため」「ので」「から」の使い分けができない。
- 12) 聞く・聴く・訊くの使い分けができない。
- 13) 推敲をしない。

この問題を克服するために春学期の後半から作品を添削することにした。添削から自由に作文できる環境にあった受講生は、突然の変化に驚きと戸惑いを禁じ得なかったようである。中には聞く耳を持たない姿勢を貫く受講生もいて、オンデマンド授業における助言の限界を痛感した。

後に学生に確認したところ、そもそも添削された経験がないことがわかった。そこで秋学期は添削に対する免疫を作ることにした。

異なる年度の受講生が編んだ作品を素材として、何処をどのように修正すべきかを指摘する課題を「添削のエチュード」として開始した。自分の作品が添削されるのではなく、他人の作品を添削するという体験は、受講生にとっては初めてのことであり、春学期とは異なる戸惑いを感じたようである。その戸惑いを克服したか否かによって、修正すべき箇所気付くことのできる受講生と、それが全く分からないまま終盤を迎える受講生の二層に分かれることになった。

さらに「換骨奪胎のエチュード」として、作品の意図を読み取ったうえで、その文体や用語にとらわれず、自身の言葉で作品を編み直す試みも加

えた。換骨奪胎の意味を理解できた学生と、その意味を辞書で調べない学生との間には明白な差異が生じた。

このほか、英語の短文を日本語に翻訳する「日本語のエチュード」も新たに加えた。英文和訳を見れば国語の力を判定できると考え、入試に国語を課さない慶應義塾大学文学部の方法を参考にした。難解な英文でないのにもかかわらず、訳文は惨憺たるものである。以下に数例を引く。

1) Man has responsibility, not power.

ある男は、力を使わずに権力を持っている。

2) Treat the earth well: It was not given to you by your parents. It was loaned to you by your children.

地球で上手く生きること。それはあなたの両親によってあなたに与えられたものではなく、むしろあなたの子供たちによってあなたに貸し出されました。

3) What you are you do not see, what you see is your shadow.

あなたが見ているものは見えません。あなたが見ているものはあなた自身の影です。

4) Remember that your children are not your own, but are lent to you by the Creator.

子どもはあなたのものではなく、創造主が貸し出してくれているだけなのだ、忘れてはいけない。

1) から 3) は、英語の文法知識、ならびに正しい日本語で表現しようとする意志と知識が欠落している典型例である。4) は接続助詞「と」の用法を理解していない。そのことを指摘したところ、格助詞の「と」として用いたとの返答があった。つまり、文法、特に助詞に関する知識が不十分なのである。以上を要するに、大学の授業だけで文章力を培うのは覚束ないということである。

9. 今後の対策について LA、TA と相談する

例年、終盤の「こんなところにそんなものが」の創作活動は大いに盛り上がり、名作が数多く編み出されるのだが、本年度は極めて不調だった。その原因とそれを克服する術について、科目を担当

した LA ならびに TA と協議し、アイデアを練ることにした。

今年度は LMS を使ったオンデマンド授業がメインで、希望者のみ Zoom に参加するかたちをとった。このことについて、初回とセメスターの中間期、「こんなところにそんなものが」が始まる前、最終回の少なくとも 4 回は Zoom を活用すべきだとの提案があった。面接授業の際には、受講生は他の受講生、LA、科目担当者と時間・空間を共有していることに安心感を覚えていたので、遠隔授業においても、それに近い環境を用意すべきだというのが、その理由である。

LA が受講生の表現の良し悪しや単語の選択の可否を指摘することはない。執筆作業の進捗がかんばしくない受講生には「どのような感じで書いているんですか」と尋ねることで、その学生が漠然と書きたいと考えていることを整理できるように支援する。そのうえで、何故、それを書きたいと考えるに至ったのか、思考や感情の履歴を確認できるように配慮する。受講生が「自分はこれが書きたかったのだ」と気づくようにサポートするのである。Zoom での参加ができるように配慮をしていたとはいえ、それは必須条件ではなかったため、時間と場所に縛られないオンデマンドを優先する受講生にとって、LA との接点はほとんどなかった。

今年度はこれまで封印していた「添削」を解禁したため、オンデマンドでも授業を進めること自体は可能となったが、LA によるサポートが限定されてしまった。課題の数に見合うだけの「相談できる環境」が用意されなかったということである。これは次期には回復しなければならないことである。

さらに科目担当者が書くことの楽しさや面白さを味わってもらいたいと願っていることが伝わるようにするためにも、毎回、Zoom でリアルタイムの授業をするべきだとの提案もなされた。添削をされるばかりだと、厳格で融通の利かない科目担当者像が作られてしまい、受講生も担当者も詮

無い思いをするばかりだと LA が指摘してくれた。

負担感の大きかった「添削のエチュード」については、受講生一人一人が取り組むのではなく、授業中に全員で何処をどのように直すべきか、互いに意見を出し合うのがよいという結論に至った。Zoom で授業に参加する学生は添削すべき課題を Google ドキュメントで共有しながら共同で添削作業をおこなう。教室で授業に参加する受講生はスクリーンに同じ Google ドキュメントを映し出し、気づいたことをその場で発言する。それを LA ないしは TA が Zoom でつながっている科目担当者に伝え、担当者が Google ドキュメントに反映させる。教室にいる受講生がデバイスを持っている場合には、直接、Google ドキュメント等へ書き込む。このことによって受講生が徒労感ではなく達成感を覚えることが可能になる。

このほか、Zoom を使えば「夏の音と言えば何」というアドホックな問いかけができる。

「夏」という単語を用いなくても季節を伝えられると知ってもらうために、以前、試みたことがある。「春の味」や「冬の色」あるいは、「海の匂い」「山の風景」などのアレンジも可能なので、これは復活させたい。

来期は LA や TA が従来のように受講生をサポートできるようにリアルタイムの授業を展開し、表現教養型の文章表現教育を再起したい。

註

¹ 文部科学省「大学における教育内容等の改革状況」各年度版より、該当項目の数字を抜粋

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/005.htm (2022.01.16 確認)

² 150 語弱を提供。なお『言葉のアルバム』は以下を参照。

<https://docs.google.com/document/d/1cmY8HMD4ojBP7AHkgDf-keYbAPSEZBYkjKxt7NlGbc/edit>

³ 88 例を提供。『いつかは使ってみたい素敵な表現』は以下を参照。

https://docs.google.com/document/d/1_Plzv62DfYE8OMB7AJZxxm-ufZWwFgtt08gSnEFLJXw/edit

⁴ 受講生の編んだ自伝的作文『150cm の航路』は、まさに紅涙を絞る出来栄であった。筆者は第 2 回関西大学 FD フォーラムでこの作品について報告した (三浦 2009)。

『150cm の航路』は以下を参照。

<https://docs.google.com/document/d/1YoMxxWidTBmJuPWAJ5Vexww6l7pN-ZlnGkDu50ohh94/edit>

⁵ その中でも名作の呼び声高い作品『私の勝ちね』は以下を参照。

https://docs.google.com/document/d/1jAAVNLCd_VAQaylJGhNG6WWvLJjqBD4lWA85GjH5ZWs/edit

⁶ 例えば「匕首」。「合口」の語義の中に短剣を意味する「匕首」が含まれるが、「匕首」には「合口」の語義である「相性」や「気心の合う」という意味はない。しかし Web 上には「匕首」に「相性」の意味を充てる辞書がある。

⁷ 筆者と LA とが取り組んだ「小学校に古代の剣」は長編になったが、打ち合わせなかったヒエログリフがどちらの物語にも登場していることに受講生は驚きを感じた。『小学校に古代の剣』は以下を参照。

<https://docs.google.com/document/d/10u6trFt05cQsdIQV4vOKqZgf7R90BsgOUDsoi78ZGYo/edit>

そのほかにも「筆箱にお箸が」という作品を筆者と LA とで編んでいる。その作品は以下を参照。

https://docs.google.com/document/d/1gvGf_bX_Rx7V8DbqT05VoieYp-LFrrmYfB8F9K4KPN0/edit

⁸ 石黒 (2013) は「そして」を便利な接続詞の代表格と位置付けているが、それに甘んじて安易に用いる学生が後を絶たない。

参考文献

文化庁文化庁国語課 (2012) 『日本人の言語生活—国語に関する世論調査 (平成 23 年度) (世論調査報告書 (平成 24 年 2 月調査))』ぎょうせい。

波多野里望編著 (1992) 『なぜ言語技術教育が必要か』明治図書。

井下千子 (2008) 『大学における書く力考える力—認知心理学の知見をもとに』東信堂。

石黒圭 (2013) 『文章は接続詞で決まる』光文社新書。

小山薫堂 (2009) 『恋する日本語』幻冬舎文庫。

三浦真琴 (2009) 「添削から創作へ」『第 2 回 関

西大学 FD フォーラム 『思考し表現する学生を
育てる』

Rodari, G.(1973/2013). *Grammatica della
fantasia. Introduzione all'arte inventare
storie*. Einaudi Ragazzi. G・ロダーリ 窪田
富男訳 (1990) 『ファンタジーの文法—物語創
作法入門』 ちくま文庫.

鈴木則夫・荒井克弘・柳井晴夫 (2000) 「大学生の
学力低下に関する調査結果について」『大学入試
フォーラム』22 全国大学入学者選抜研究連絡
協議会.

渡辺哲司・島田康行 (2017) 『ライティングの広大
接続 高校・大学で「書くこと」を教える人た
ちへ』 ひつじ書房.

渡辺哲司・松濤誠之 (2021) 『木下是雄と学習院
「言語技術の会」—日本初、小・中・高・大・
社を貫く言葉の教育に挑む』 Next Publishing
Authors Press.

全国大学国語教育学会 (2018) 『国語教育における
調査研究』 東洋館出版社.